

Title	鄭懷徳撰『良斎詩集』, 新亜研究所東南亜研究室(東南亜研究専刊之一)
Sub Title	Trinh-Hoai-Duc (鄭懷徳), Can Trai Thi Tap (良斎詩集)
Author	木村, 宗吉(Kimura, Sokichi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1965
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.37, No.4 (1965. 2) ,p.101(465)- 103(467)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	批評と紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19650200-0101

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

の發達を余儀なくしたのであるとしているのである。

本書の最後の三章は、ジョン王の治世を取扱っているが、それはジョン王を「最悪の王」、「a faithless son, a treacherous brother, an ungrateful master」、「国民によつては憎くべき暴君」と見る Stubbs 説に対する批判である。このことは既に Sidney Painter の *The Reign of King John*. (Baltimore, 1949) 以来一般化している見方であろう。唯その論証に當つて、極めて鋭い史料の吟味の行はれていることと、単にジョン王に関する部分のみではなく、全篇にわたつて、細部についても幾多の貴重な提言と論証が行はれていることは忘れてはならない。

要するに本書は、Stubbs の偉大な名声によつて今尚中世国制史研究上に残つている一九世紀的 Whiggism の偏向の打破を指したものである。しかし全篇を通じて、反 Stubbs の感情が余りにも強く、反論的な性格が余りにも著しい。又論究も可なり細部にわたつていて、目的・内容ともに、専ら「進んだ研究者」のためのものであつて、決して「一般読者」のものではない。ここに紹介した点も、ここには紹介しなかつた諸点も、共に極めて有益なものをもっている。その幾つかは我々初学の徒が直に從へ得ようが、又或るものは有益な示唆ではあつても、彼等の結論を直に自説として取入れることには、やや危惧の念を懐かざるを得ないものでもないではない。しかし、我々の研究途上に、多くの反省の機会を与へると言う点に於いて、我々を啓発する所すこぶる大なるものがあると考へるべきであらう。

批評と紹介

鄭懷德撰『良齋詩集』

新亞研究所東南亞研究室(東南亞研究專刊之一)、香港
一九六二年、一三四頁。

木村宗吉

本書は、香港の中文大學新亞書院研究所東南研究室が、東南亞研究專刊之一として、一九六二年に出版した鄭懷德の詩集である。鄭懷德 (Trinh-Hoai-Duc 1765-1825) は、云うまでもなく、越南阮朝の嘉隆・明命二帝に仕えた優れた華僑出身の政治家であり、また、『嘉定通志』の著者として名高いが、彼はまた詩を能くし、多くの作品を残している。しかし、鄭懷德の作品は、大部分は散佚もしくは断篇を残すのみであり、比較的まとまつた形で伝つた『良齋詩集』も、一般には、閲読の機会を得るのが困難であつた。されば、今回、同研究所が『良齋詩集』を校訂出版し、学界に紹介されたことは、まことに意義が深い。

さて、目次を見ると、一、良齋鄭懷德：其人其事(陳荆和)二、良齋詩集全編(鄭懷德撰)三、英文簡介、となつており、まず、陳荆和教授が、鄭懷德の略歴と、『良齋詩集』ならびに他の著作の解説をおこなつている。

鄭懷德は、幼名安、字は止山、良齋と号した。祖父は、福州長樂県の人であり、清初、清朝の支配に服せず、安南の鎮辺(今の辺和)に逃れた中国人である。鄭懷德が成長した時代は、ちょうど西山

の大乱中にあたり、一七八八年、阮福映が嘉定を回復すると、懷徳は阮福映に仕えた。一八〇二年(嘉隆元年)、越南三圻の統一がなると、懷徳は戸部尚書に任ぜられ、次いで、正使として清に国書、貢物を齎し、翌一八〇三年、嘉隆帝は清から越南国王と封冊された。一八〇五年(嘉隆四年)、懷徳は、嘉定協留鎮に任ぜられた。一八〇二年(嘉隆十一年)、懷徳は順化に呼びもとされて礼部尚書に任ぜられ、翌一八一三年、吏部尚書に転じて、一八一六年(嘉隆十五年)まで、その職にあつた。

一八一六年、嘉隆帝は嘉定の重要性に鑑み、吏部尚書鄭懷徳を再び嘉定協總鎮(嘉定鎮は、一八〇八年、嘉定城と改められる)に任じた。嘉隆帝が卒し、明命帝が位を継ぐと、帝は懷徳に協辦大学士の位を与えて吏部尚書に任じ(一八二一年)、翌一八二二年(明命三年)、礼部尚書を兼ねさせた。当時、懷徳は、すでに阮朝の元老であり、明命帝の最も重要な顧問としてすべての重要な政事に参預していた。かように、懷徳は、嘉隆・明命二帝に仕え、明命六年(一八二三年)三月、順化において長逝した。享年六十一。

鄭懷徳の著作としては、『歴代紀元』・『康濟録』・『北使詩集』『華程録』・『嘉定三家詩集』・『嘉定通志』・『良齋詩集』等が知られているが、この中、『嘉定通志』と『良齋詩集』以外は、前述したように、散佚もしくは若干の断篇を伝えるのみである。

『嘉定通志』は、二云うまでもなく、越南南圻に関する重要な地誌であり、陳教授は、この書が、『大南寔録』(前編、正編第一、第二紀)『大南列伝』(前編、正編、初集)ならびに『大南一統志』の重要な一典拠となつて

おり、これによつても、この書が南圻の歴史ならびに地理研究の頭等史料であることを指摘している。

ところで、『良齋詩集』は、第二次大戦前は、順化の王宮の新書院ならびに聚奎書院が各一本を蔵し、河内の極東学院が三部の鈔本を蔵していたことが知られている。今日、極東学院の鈔本については知る由もないが、順化の王宮の新書院ならびに聚奎書院は、その後、合併して保大書院となり、現在は、教育部考古院の管理のもとにある。その間、甚だ多くの蔵書が散失したが、現在、『良齋詩集』の木刻本一部を蔵している。しかし、この木刻本は、すでに蠹蝕甚だしく、巻首ならびに巻末が欠張している。ところが、幸いに、西貢の印度支那協会 (Société des études indo-chinoise) の蔵書中に一部の鈔本があり、これにより前者の不備を補うことができる。ただ、刊本とこの鈔本との間には、各編の配置、詩句の間の原註の有無等に多少の差があり、陳教授は、両者を比較し、鈔本により刊本の欠を補つて、校訂本を作成されたわけである。『良齋詩集』は、五つの部分よりなり、各部分の内容を、教授の解説中より抜萃して示すと、次のようになる。

卷首：有礼部左参知阮迪吉之詩序(嘉隆四年仲春)・吏部参知吳時位詩跋(嘉隆四年仲春)及翰林院行嘉定城正督学高輝耀詩跋(嘉隆十七年孟秋)。

退食追編集：蒐集自壬寅年(即乾隆四十七年、黎景興四十三、一七八二年)至辛酉年(即嘉慶六年、西山阮氏景盛九年、一八〇一年)約廿年間所作之旧詩凡一百二十

七首。

觀光集：彙集壬戌及癸亥兩年（即嘉慶七十八年、阮朝嘉隆元二年、一八〇二年—〇三年）間懷德奉命如清請封、往返途中所賦之詩稿、凡一百五十二首。

可以集：收拾甲子年（嘉慶九年、嘉隆三年、一八〇四年）以後至戊寅年嘉慶廿三年、嘉隆十七年、一八一八年）間應制、贈送、哀輓及雜咏等、凡四十八首。

自叙（序）：叙述家系・履歷・出使中國經過及刻刊本詩集之原由、題為嘉隆十八年（一八一九）三月二十日、即懷德去世之六年前、亦可知該詩集當在此年中刊行。

『良齋詩集』は、教授の云われるように、単に文学作品であるのみならず、随所に見られる原註や、懷德の自序により、十八、九世紀における中越交渉史の貴重な一史料であり、また、越南華僑史の研究者にとつても、特殊な価値を有するわけである。

なお、同研究室は、東南亞研究專刊之二として、去年（一九六三年）、陳荆和『十六世紀の菲律賓華僑』を出版し、さらに、近く、專刊之三、四を出版すると聞く。活躍を期待してやまない。